

養蜂振興「飛躍」の年に

秋田屋本店会長
中村 源次郎さん
1951年7月10日生まれ

「ウサギが『ビョン』と跳ぶように、新型コロナウイルスと社会活動の共存が続くウィズ・コロナから、コロナ禍を克服するBEYOND(ビヨンド)コロナの2023年になれば」と飛躍の一年を願う。

養蜂・食品製造を手がける秋田屋本店の社長を21年11月に長男に承継。以降は会長として会社を支え、とともに、県養蜂組合連合会長など業界団体や公職といった対外的な活動に精力的に取り組む。「ミツバチは花粉の交配によって植物を育成させ、農作物の収穫も担う。養蜂は積極的なSDGs(持続可能な開発目標)」と強調。「養蜂の啓発に加え、蜜源植物の植樹や蜂蜜の国内自給率の向上につながる取り組みができれば」と今年の抱負を語る。(岐阜市在住)



2023年の干支は卯。ウサギが跳ねるように飛躍の一年としたい。卯年生まれは柔和な人柄で信頼を得て、人を引きつける魅力があるといわれる。新たな思いを胸にスタートを切る年男、年女の5人に抱負を聞いた。



ぎふ

2023

年男年女
新年の抱負

関係修復へ着実な前進

県日中友好協会会長
杉山 幹夫さん
1927年7月31日生まれ

8度目の年男。今年も岐阜新聞社最高顧問として県内を飛び回る。「好きな言葉は、愛、勇気、忍耐。新聞は創刊142年目、岐阜放送は60年を迎え、これからも手伝いを続けていく」と意欲を燃やす。

1962年に岐阜市の代表として中国・杭州市を訪れ「日中不再戦」の碑文を交換した岐阜日日新聞社(現岐阜新聞社)社長の山田丈夫氏の遺志を継ぎ、95年から県日中友好協会会長を務める。「冷え込む日中間の関係を一歩二歩と前進させてほしい」と願う。羽島郡笠松町の商家に生ま



れた。「川邊として栄えたまち。おれほど用があったのに今は一隻もないのは寂しいね。」「喫茶店に行けば昭和のレコードが流れているような、高齢者が笑顔で過ごせるまちが理想」と古里への愛を語る。(岐阜市在住)

パリ五輪切符、勝ち取る

新体操団体日本代表主将
鈴木 歩佳さん
1999年9月27日生まれ

「悩みも迷いも忘れて世界選手権でメダルを獲得する。オリンピックの出場枠を勝ち取る目標だけに突き進んでいきたい」と2024年パリ五輪出場が懸かる勝負の一年に臨む。

初の五輪メダルに挑んだ前回の東京大会は無念の8位。「メダルを目指して日々練習していたが、悔しい結果になってしまった。オリンピックって本当に簡単なじゃないかと痛感した」と話す。

団体メンバーが一新され、臨んだ昨年9月の世界選手権ではパリ切符を逃した。「全



©日本体操協会

てが新しい状態の昨年は、最初から最後まで悩みながら迷いながら進んできた」と語る。「パリでは絶対にメダルを獲得する。勝負は今から始まっている。一日も無駄にせず日に日成長したい」と決意する。(安八郡安八町出身)

感謝の心で後進を育成

十六銀行頭取
石黒 明秀さん
1963年9月19日生まれ

多くの人と出会い、地域の特徴に触れた経験が力になった。還暦を前に「入社してから先輩や上司、多くのお客さまに温かく育てていただいた感謝の思いが強い。この年まで仕事ができることに幸せを感じる」とかみしめる。

2021年に頭取に就任。変革を進める中で「受けてきたご恩を若手に返していきたい。動機で良かったと思われる組織にしたい」と意気込む。

柔道家の顔を持つ。実力は6段。「剛毅木訥」の言葉を胸に、仕事も「不器用でも意志を強く持ってやるという信



念を持って取り組んできた」と力強い。最近では社業を優先する中で、新型コロナウイルスの影響もあって道場を訪れる回数は減った。「コロナが落ち着いたなら、子どもたちに柔道を教えていきたい」とほほ笑む。(岐阜市在住)

耳を立て情報キャッチ

未来工業社長
山田 雅裕さん
1963年6月10日生まれ

還暦を迎えるが「節目だからといって特に意識することはない。ただ卯年なので、ウサギのように耳をそばだてて情報をいち早くキャッチしたいね」と笑う。

新型コロナウイルス対策は「政府は緩める方向だが、引き続き警戒感を持って取り組む」ときっぱり。「本来なら営業所や工場をもっと回りたいたが、感染を広げるリスクがあるからできない。お客さんの信頼に応え、メーカーの務めを果たす」と自負をのぞかせる。今年も建築市場は底堅いとみるが「より筋肉質の会



社にしていこう」と意欲を示す。音楽や舞台好きで知られる。「2019年に(ロックバンドの)U2のライブに行ったきり、音楽から遠ざかっている。コロナが落ち着いたなら、もっとライブや芝居、映画に行きたい」(大垣市在住)